

## 事業の背景・目的

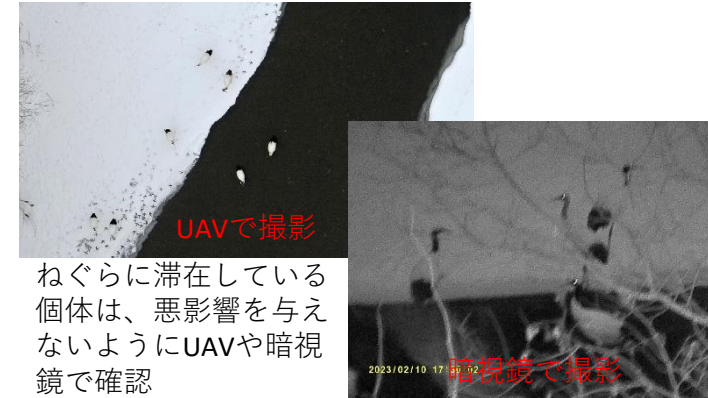
日本のタンチョウは狩猟や生息地の破壊により絶滅の危機に瀕したが、給餌等の保護活動により、現在は約1,500羽になるまで個体数が増加した。しかし、大規模な給餌場が存在する釧路総合振興局管内において全体の約9割が集中して越冬している。そのため、鳥インフルエンザ等の感染症が発生した場合、個体数が大きく減少するリスクを抱えている。環境省は平成25年に「タンチョウ生息地分散行動計画」を策定したが、まだ具体的実施の段階に至っていない。この計画を進展させるには、精度の高い生息状況の把握と環境調査が必要である。そのため、地域住民の認識も十分ではない十勝地方で調査を行い、分散を推進する方策の検討・確定および実施に寄与することを目的とする。

## 事業の内容

### タンチョウ分布状況調査事業

**方法：**十勝管内の市町村を自動車で移動し、本種の発見に努めた。個体を認めた際には、日時、位置情報、個体数（判別可能な場合は、成鳥・幼鳥別）および環境等を、また、可能な場合はUAV、暗視鏡、デジタルカメラやビデオを使用し映像を記録した。予備調査として10-11月に7回、本調査として12-2月に25回実施した。なお、補足調査として3月に1回実施した。

**結果：**確認数および生息確認市町村数  
2022年12月：195羽、9町  
2023年1月：138羽、8町  
2023年2月：204羽、12町村  
個体を確認した地点の環境は、12月は収穫後のデントコーン畑、1-2月は河川や農家敷地（牛舎脇、堆肥置場やバンカーサイロ等）が多かった。



## 得られた成果

上記の調査を実施したことにより、十勝管内の越冬期におけるタンチョウの生息・分布状況を把握することができた。一方、北海道が令和5年1月24日に実施した令和4年度第2回タンチョウ越冬分布調査において、十勝管内におけるタンチョウ確認数は前年度同期比9羽増の82羽、確認市町村数は4であった。本事業と北海道の調査方法は異なるため単純な比較はできないが、1月の結果と比べると確認数で56羽、市町村数で4自治体の違いがあった。ただし、気温や積雪などの状況により越冬場所は変化する可能性があり、単年度ではなく複数年度にわたる継続した調査が必要不可欠である。

来年度以降、本事業と北海道の両調査結果を精査し、確認地点等の情報を共有することで、効率的な調査の実施と精度の向上が見込まれる。また、調査結果を活用したパンフレット等を作成し、地域住民の本種の生息・分散ならびに保全にかかる理解や意識の醸成を図る取り組みを行う予定である。